

## Ⅱ－２ フィールドワークはどのように行われたか ——森岡清美の能登真宗教団研究調査の経験から——

桜井 厚

### はじめに

現東京教育大学名誉教授、森岡清美は1961年に論文「真宗教団と「家」制度」によって東京文理科大学から文学博士の学位を授与された。この学位論文に関わる真宗教団の調査を始めたのは1950年代に入ってからである。本稿は、この1950年代に行われた真宗教団に関する調査を跡づけることによって、森岡清美が社会調査の黎明期とでもよべる時期にどのように社会学的調査を行ったのか、そのフィールドワークの実態をいくらかでも明らかにすることをねらいとしている。

森岡は『ある社会学者の自己形成』（2012年）をはじめとして多くの研究史に関わる自伝的な記録を著しており、また私たちのプロジェクトの依頼にも応じて気軽に調査の状況を語ってくれているので、本稿はただそうした氏自身の言葉をなぞって私たちなりに整理するだけに止まるかもしれない。しかしながら、こうしたフィールドワークによる資料収集の実践については、こと社会学では社会調査法のテキストには一般的な手法や注意が添えられていても具体的に実践記録がまとめられた報告は少なく、社会学調査の黎明期といえる時期における報告はなおさらヴェールに包まれているといつてよい。後学のものから見れば、その視点からだけでも知りたい興味がわくのではないかと思う。

では、私たちの関心を充足するためにはどのような点に注目すればよいのだろうか。この点については、すでに森岡自身が宗教社会学的研究において、数あるアプローチの中でどのような方法をとったかを自らの歩みを振り返って整理しているので、参考になる。そこでは、研究アイデア（研究の視角、発想、アプローチ、キーコンセプトなど）が育つための知的環境として三つをあげている。一つ目は重要な他者、二つ目は専門研究書・既刊資料等、三つ目は未刊資料である。いうまでもなく、一つ目の重要な他者とは、研究の機会や研究過程でなんらかの影響を受けた人であり、三つ目の未刊資料とは locality bound の性格をもつといい、まさしく調査地でフィールドワークを通して収集するものである。具体的には、古文書などの記録資料、地元の人びとの語りから得る口述資料、そして調査者が観察や体験することから得られる体験資料、があげられる（森岡 1993:123-125）。そこで本稿でも、この時期、森岡にとって重要な他者であったのは誰でどのような影響を与えたのか、また現地の未刊資料をどのように収集したのかにとくに注目して整理を試みる。

### 1 社会調査の第一世代

今日では、社会学関連のコースがある大学なら大抵のところ、社会調査法が授業のカリキュラムに用意されている。しかし、社会学の第1世代にあたる研究者は、海外の文献を参照しながらも調査地において自らの調査の実践を通して鍛えるよりほかなかった。森岡清美もそうした世

代の一人にほかならない。彼はもともと東京文科大学の倫理学専攻の学生であって、たまたま社会学の岡田謙教授のアメリカの社会調査の紹介を聞き、「これなら自分でやれる」という思いから、自らの出身地をフィールドに手探りで調査をして卒論をまとめた。当時は「調査の手引きなんて全然ないんです」と述懐するように、倫理学専攻の学生であったからだけでなく「社会調査法」に類するテキストはまだほとんどなかったから、文字通り自ら調査を実践しながら自分なりの調査法を鍛えたのである。森岡は、有賀喜左衛門や鈴木栄太郎などの農村研究の著書、論文を読んで調査項目を拾い上げて項目一覧を復元して「全体としてこのぐらいの項目を調べれば農村調査になるだろう」と考えて卒論の調査を始めたのだった。東京文科大学卒業後は同大学研究科へ進学し、第一期特別研究生となって岡田教授を指導教員としたが、とくに「何も教えてくれないですよ。自分で餌を探してこい、春には帰ってこいというぐらいですよ（笑）」というぐらいの指導だったから、社会調査法の教育など推して知るべしであった。特別研究生を修了、その年東京教育大学・東京文科大学の助手に就任して本格的に研究者の道を歩み始めたのだった。1950年のことである。

この年、調査法についての「大転換」が起きる。森岡自身がこのときのことを、そのように呼ぶほどの絶好の機会が訪れたのであった。1950年の7月、東京大学の福武直教授から声をかけてもらい労働省婦人少年局婦人課の「農村婦人の生活」調査の手伝いを依頼されたのだった。東京大学では戦前から戸田貞三が教鞭をとり経験的社会学の立場から『社会調査』（1933年）を著していたように、すでに数多くの農村についての実態調査が行われていた。東大生はみな「調査のノウハウはちゃんとあるわけです」と、森岡は東京文理大時代の当時のお粗末な学習状況と引き比べて、雲泥の差があったと強調する。そんな背景をもつ研究仲間のプロジェクトへの参加である。福武教授からの依頼であったが、「農村婦人の生活調査」の主査を務めたのは、民俗学者の竹内利美だった。竹内は、当時、GHQの民間情報教育局に勤務しており、日本社会の実態調査などをアメリカの農村社会学者や人類学者が行っていたことから日米双方の社会調査の方法に通じていた。この調査には、ほかに東大助手の塚本哲人や大学院生の杉政孝が参加した。

調査票は3種が用意された。ひとつは、具体的な事実についての調査項目をあげておき、そこに聞き取った内容を書き込む構造化されたもので、スケジュールと呼ばれていた。二つ目は意識調査で使われる構造化された質問紙調査であった。もうひとつはインタビュー調査で、10人ぐらいの人を対象に綿密に聞き取るもので、聞く内容の大項目は設定されているが、具体的な細目は自由に応えてもらう調査票であった。調査地は、群馬県、山形県、岩手県、愛知県、岡山県の5カ村におよんだ。最初に群馬県甘楽郡額部村を調査したが、4人とともに婦人課所属の事務官10人ぐらいが調査員として同行した。残りの4カ村は分担して調査したが、森岡自身は、結局、5カ村のうち群馬県以外にも山形県の庄内平野の村、愛知県の蔬菜栽培の村、岡山県の二毛作の村の4カ村の調査に携わり、その年の八月のほとんどをこの調査に費やしたのであった。

そこで初めて私は調査というものの全貌をつかみました。(中略) 本当がいい訓練で、私の社会調査の明治維新がきたわけです。それがいちばん大きい。その当時は、社会調査の手引き書は全然なかった。何もないです。福武さんが安田三郎君と一緒に翻訳したランドバーグ (G. A. Lundberg) の Social Research (1942、訳『社会調査』1952) と並行して、ポーリン・ヤング (Pauline V. Young) という人の Scientific Social Surveys and Research (1939)、

後者の方が私にとっては手引きになりましたね。(2012.1.31)

森岡自身が自ら「社会調査の明治維新」と呼ぶほどだから、森岡にとっては社会調査をまとめた方法として体験できた初めての機会となったのである。

## 2 真宗教団研究への入り口

助手に就任するまえの特別研究生の頃に時間を戻すと、森岡は自分の研究テーマを探すなかで、当時、日本社会学会で主流となっていた同族研究への関心から、自分の郷里の三重県を本拠とする真宗高田派に目を付けた。その本寺末寺の関係は、本家分家、本末関係と同質のものと考えられるとして調査に入ったのである。この詳しい事情は、森岡本人が自伝『ある社会学者の自己形成』(2012)などで述べているので簡単にふれるが、フィールドワークの観点から注目すると、本山が津市にあること、全部で約620寺のうち67%までが三重県中勢地方に集中しており、出身県でもあることから資料収集が容易であると判断されたからだった。1949年度は、この高田派寺院の史料収集と面接調査を集中的に行ったのである(森岡 2012:95)。翌年3月には、その成果を論文にまとめ学会報告をしたにもかかわらず、思わしい反響がなかったために論文にまとめたものの公刊はしなかった。森岡は、この未刊の論文について、11年後の学位論文と引き比べて「荒削りながら後年の知見の大要がすでに示されていた」(1993:105)と振り返っている。特別研究生および助手の時代のこの時期、ほかに神社祭祀組織、地方基督教会の現地調査も行っており、「研究の仕方、研究者の在り方について全く不安内のまま」(1993:106)だったと振り返って述べてはいるものの、フィールドワークを基礎にした実証研究を本格的に始めた時期であった。

## 3 九学会連合調査に参加

九学会連合の対馬の共同調査が始まったのは、1950年であった。戦後すぐの学界状況はGHQの統制下でもあり、経済も疲弊した状況下であって、海外はいうまでもなく国内でも大規模なフィールドワークを行うことは困難な状況であった。こうしたなかで、日本民族学協会会長の渋沢敬三らが中心となり、1947年に日本人類学会、日本民族学協会、民間伝承の会(49年に日本民俗学会に改称)、日本社会学会、日本考古学会、日本言語学会の六つの学会からなる六学会連合が結成された。その後、1948年に年日本地理学会と日本宗教学会、1951年に日本心理学会も参加して九学会連合となったが(対馬調査の当初は八学会連合であったが、通称、九学会連合と呼んでおく)、対馬の共同調査は、戦後初めての代表的研究者による大規模なフィールドワークとして注目されるプロジェクトであった(この経緯については、坂野 2012参照)。対馬調査には、東京文理大から和歌森太郎、直江廣治、桜井徳太郎、竹田旦、そして森岡の指導教員である岡田謙、また1949年の専攻設置と同時に有賀喜左衛門とともに就任し、同僚となった中野卓講師が関わっていたから森岡にとって身近な研究者が参加している調査プロジェクトであった。ちなみに、和歌森、直江、桜井、竹田は日本民俗学会の委員、岡田と中野は日本社会学会の委員の立場から参加した。

森岡は真宗教団研究の成果をあげることができた理由の一つに、こうした知的環境があったこ

とを認めている。「1950-51年の九学会連合による対馬調査に刺激されて、1951年夏先輩の桜井徳太郎氏（当時東京文理科大学助手）と相語らい、金沢市東郊の山間集落・二俣で真宗大谷派の名刹本泉寺を調査した。このことも一つの機縁となって」（森岡 1993:107）、翌52年から2年間にわたって行われた九学会連合能登調査に加わることになったのであった。「機縁」とは、まさしく知的環境のなかで「重要な他者」としてあげている人物との出会いや影響によるものにほかならない。能登調査に参加した東京教育大学（東京文理大は1953年に閉学、文理大教員は東京教育大学の所属となった）の社会学科教員は、有賀喜左衛門、中野卓、森岡清美であった。

能登調査の重点をおく調査地域は、1年目は奥能登、2年目は口能登になった。1年目は、森岡は第6班「奥能登における新旧文化の接触」に属した。この第6班の陣容は、調査に入る前の6月に各委員に配布された名簿では以下のようにになっている。

氏名（所属機関、所属学会）	研究分担テーマ
班 長：池上広正（立教大学講師、宗教）	固有信仰としての神道の研究（山伏山周辺）
研究員：森岡清美（東京文理科大学助手、社会）	同上
研究員：戸田義雄（国学院大学助教授、宗教）	仏教諸派の伝播（奥能登）
研究員：柴田武（国立国語研究所員、言語）	方言と標準語の相互関係（山伏山周辺）
研究員：桜井徳太郎（東京文理科大学助手、民俗）	固有信仰と仏教信仰（特に真宗信仰）との接触において見られる習俗の融合・変容について
調査員：北村甫（国立国語研究所員、言語）	
調査員：山下久男（石川県大聖寺高校教諭、民俗）	

ところが、九学会連合能登調査委員会編『能登——自然・文化・社会』（1955、平凡社）の巻末に掲載された第6班の構成では、調査員の名前はなく四柳嘉孝（民俗学研究所員）が新たに加わり、それぞれのテーマにも変更が見られる。分担テーマをあらためてあげると池上・森岡「町野町及びその周辺の宗教生活」、戸田「奥能登における仏教諸派の伝播」、桜井「奥能登における固有信仰と仏教信仰との接触を通して見た習俗の研究」、四柳「奥能登の農耕儀礼」、柴田武「町野町の言語生活」となっている。所属機関も、森岡と桜井は東京理科大から東京教育大学に変更になっている。文理科大が53年に閉学し、所属替えになったからである。

ともあれ、人員の変更理由は詳らかではないが、テーマのいくらかの変更は実際の調査にあたって生じたものであった。それは能登調査のなかの第6班の調査の概況から知ることができる。1952年12月22日、熱海の竜泉閣で1年目の調査報告会が行われた。この報告が『座談会 能登の実態』（1954）に収められている。

まず、この第6班が掲げた「奥能登における文化接触融合の問題」という大きなテーマがどこから出てきたのかと言えば、それが能登調査全体のテーマとの関連から設定されたものであることがわかる。金田一春彦の記すところによれば、能登半島が対象に選ばれたのは、その地理的位置として東日本と西日本の文化の交錯する場所であること、古くからの日本海交通において果たした歴史的役割、能登半島と朝鮮・中国との地理的關係による大陸文化の受容、また生活の諸相において歴史的に古い要素を残しているのではないかと、そうした問題意識からであった。古い文化に新しい文化がどのように影響したかという文化接触の発想は、否応なく「古い要素」を探しまわることになり、この調査団の態度は地域振興の期待をもつ地元の人間といくらかの齟齬や確

執をもたらしたようだ（坂野 2012:79）。

ともあれ、そうした大きなテーマを掲げた第6班は、具体的な調査では、どのようにテーマをしぼったのだろうか。班長の池上が調査の輪郭を語っている。能登は真宗が浸透しているので、真宗をとりあげることにし、調査地点を町野町字川西集落に設定し全員で8月初旬に調査に入った。調査の方法としては、池上は「町野の川西の部落をインテンシブにやりまして、その町の構造と機能というものを見て参り、併せて、その隣接諸村をエクステンシブに見て行きまして、川西に見られる現象は、特殊なものであるか、あるいは普遍的なものであるかということ、一応見当をつけたいというふうに考えて参ったんであります」と説明している。そのうえで、各々が調査対象をしぼって調査を行い、森岡が川西の村落構造と真宗教団の調査を行ったことを紹介している。しかし、この池上報告の「川西の部落をインテンシブにやり」というのは、のちの森岡の説明からもわかるように、ほとんど森岡単独のフィールドワークの一端を述べたものであって、第6班全員で行った調査ではなかった。

その後、各担当者が順に報告をし、森岡は初年度の知見について、現在の真宗門徒組織について寺門徒団と地域門徒団の二つの概念に分けて説明している。町野町の三つの寺、金蔵部落の正願寺、慶願寺と鈴屋部落の長光寺が川西部落に門徒団を形成していることから各寺の講中としての門徒団（寺門徒団）が川西という一つの地域でまとまった一つの組織（地域門徒団）をもっており、そこでは「お座」が主要な行事であることが報告されている。また真言宗のお寺も調査しており、この組織構造の在り方は真言宗でも相似であるものの信仰において真宗の方が熱心で真言宗は受動的であるといった差異にも言及している。報告自体は概要を述べた短時間のものではあったが、1年目にもかかわらず二つの門徒団の概念を提起していることなどから森岡がこの調査に並々ならぬ熱意を込めていたことが察せられる。その熱意はフィールドワークの一端を述べた点からもうかがえ、たとえば座談参加者の質問に次のように応えているところにも現れている。

本日は川西に関する諸寺院についてだけ申し上げたのですが、ちょうど、正願寺で報恩講がありましたときに御通夜に参加して、そこに来ている各地の門徒から状況を聴取し、また私自身、自転車で町野川の谷を廻行して、実地に確かめた結果、大体川西的なものが奥能登一帯に共通の性格ではないかという結論を得た次第です（九学会連合能登調査委員会 1954:66）。

一地域のモノグラフ的調査に満足することなく、他地域まで出かけて川西の調査事例が決して特殊事例ではないことを確認しているのである。すなわち、森岡は班の一員として1952年8月初旬に町野町を訪れ全域の真宗寺院と川西集落の祭祀組織と門徒団を調査し、11月に単独で再訪し、年中行事の報恩講における寺と川西双方の門徒団活動を参与観察した。上記の座談会の報告は、この2回のフィールドワークをもとにしている。あらためてこの時期の真宗教団関連の森岡単独のフィールドワークの日程を整理すると、52年11月下旬、21日～26日に川西の地域門徒団で開かれる「お座」に参加、ついで27日の「お日中」から28日の「逮夜」まで正願寺報恩講を徹夜で体験し、この間の27日午前中に町野川沿いに柳田村までの各地の真宗寺院を川西の住民の案内で訪ねたのであった。

翌53年、能登調査委員会は、当初の予定通り、奥能登から口能登へ調査地域を変更した。この

ときの調査委員会の構成は、以下のようになった。

全体が3班に分かれ、第2班は「口能登における地域社会の構造と機能」と題されたテーマのもと四つのグループに編成された。Aグループ「七尾市及びその周辺における社会構造と産業形態の研究」、Bグループ「漁村石崎の社会構造と漁業形態の研究」、Cグループ「口能登における漁民のパーソナリティの研究」、Dグループ「口能登における地域社会の宗教的機能の研究」である。いうまでもなく森岡はDグループに属した。Dグループの代表は池上広正、1年目と同じく戸田、森岡、桜井がメンバーで、新たに土屋光道（東京大学大学院特別奨学生、宗教）と助手が加わっている。特に個別のテーマは掲げられていない。

Dグループは調査地に鹿島郡越路町芹川を選定し、8月初旬に調査を行った。森岡は奥能登門徒団と比較するつもりで、単独で11月に再調査を行い、その際、町野町へ足を延ばして3度目の調査を行っている。そして、その後も町野町金蔵にあって宿を提供してくれた正願寺へは何度も訪ねている。学位論文をもとに1962年に出版された『真宗教団と「家」制度』は「金蔵の正願寺が起点なんです」と言う。「真宗教団の組織構造のいわば原型というか、それを大きくすれば真宗教団になるというその原型みたいなものをみて、そこで真宗教団を全体的に取り扱う方向性が開けたんです」(2014.2.24)と、この能登調査がいかに自らの研究の核心であるかを語っている。2年間の能登調査終了後に刊行された九学会連合能登調査委員会編『能登——自然・文化・社会』(1955)には、「第2篇 社会と生活」の中に「第2章 宗教生活」が収められている。著者名には池上広正、森岡清美、土屋光道の3名が連記されているが、結局、実際に執筆したのは森岡ただ一人であった。この事情については、あとでもう少し詳しくふれたい。ただ、一人で執筆したことから森岡が奥能登の町野町を中心とする調査から得た多くの知見を自由に記述できたに違いなく、したがって「宗教生活」の内容は、ほぼ奥能登の門徒団調査の分析に集中している。口能登の調査結果は、わずかに「むすびにかえて——口能登門徒団との比較」において奥能登との違いとしてふれられたのみであった。

## 4 森岡フィールドワークの実態

### 4.1 調査地の「現在」を訪ねて

森岡が川西地区および金蔵地区の真宗寺院をどのように調査したのかを、もうすこし詳しく探ってみよう。そのためにはフィールドワークが行われた現地の状況を把握しなければならない。私たちプロジェクトチーム（小林多寿子、徳安慧一、庄子諒と筆者）は、まず調査地である能登を訪ねることにした。能登を訪問する数日前、小林と私は森岡先生宅を訪ね、あらためて能登のフィールドの情報をいくらか得ることができた。では、調査地訪問の行程をかいつまんで述べておく。能登調査が行われて65年後にあたる2017年11月29日～30日にかけて二日の旅程を組み、まず、1日目に車で口能登の羽咋を出発、輪島経由で奥能登の町野町を訪ねた。その日は午後遅くに町野町に到着、町野町川西集落と金蔵の慶願寺、正願寺、また鈴屋の長光寺、また金蔵にある真言宗の金蔵寺を訪れ、位置の確認と集落や境内を歩き観察した。その日は、輪島市内に古くからある川端旅館に宿泊した。それは森岡がフィールドワークで利用した旅館が川端旅館と聞いていたからであった。しかし、これは私たちの勘違いで、森岡が宿泊したのは町野町にある川端旅

館であった。翌日確認したところ、町野町町内の川端旅館はすでに廃業していた。

2日目は、あらかじめ約束してあった正願寺の松原洋住職夫妻を訪ね、過去の思い出話と共に現状の寺と門徒との関係などについての話をうかがい、つい2日前が報恩講だったこともあって「お斎」の接待を受けた。森岡は自著のなかで、「現地調査でお世話になった正願寺住職松原実師ご夫妻はじめ多くの方々の、温かい思い出は半世紀をへた今も色褪せることはない」(2012:107)と感謝の言葉を述べている。私たちが会った息子の洋夫妻も変わることなく温かく迎えてくれた。午後、川西地区を徒歩で歩き、森岡の論文や語りに出てきた集落の家々を訪ねてみた。空き家になった家やなくなって空き地になったところもあるが、大まかな道筋や地形が変わっていないため、おおよその家だろうと特定できた家が少なくなかった。町野川沿いに位置する川西地区は町野の中心地にあった川端旅館からは約1キロ、正願寺からは2キロ以上離れている。これらの道を何度も徒歩で往き来した森岡青年の調査を、のどかな田園風景を望みながら想像することができたのだ。

私は2019年3月9日～10日にかけて、単独で町野町を訪れた。このときは、森岡が記録した写真集『Photo-Record』に掲載された写真と同じ光景の写真撮影を主な目的にしたもので、これは「写真から見るフィールドの風景」と題して、本誌に別稿として掲載した。

以上の現地訪問と、これまでのインタビューを通して得た森岡による説明と、フィールドワークが行われた1952～53年当時の調査時の記録（主なものとして、写真集としての『Photo-Record』3冊およびフィールドノーツ5冊）をもとに森岡のフィールドワークの具体的な様相を描いてみることにしたい。

#### 4.2 調査地の選定

九学会連合能登調査では1952年は調査地として「奥能登」が選ばれたものの、具体的な調査地は各班に任された。それでは森岡のフィールドとなる川西はどのように選択されたのだろうか。

まず町野町が調査地に選定されたのは、森岡の記憶では「おそらく池上さんが決めたのか」というように、森岡の選択ではなかった。「能登調査の経過を顧みる」(九学会連合能登調査委員会、1955)によると、1952年度は「池上班(第6班)は主力が町野町に腰をすえて集中調査、同班の遊撃隊は各地に転じて側面調査を行った」という。『Photo-Record』には、第1回目の調査については「池上広正氏と協力して、川西の調査にあたった」と記録しているものの、森岡の記憶では「池上さんは金蔵へ行ったこともないと思います」と語っていることから、当初から川西の実質的な調査は学生の助力を得たものの森岡がほぼ単独で行ったようだ。実際、最初に町野町の川端旅館「一晩かそのぐらい」で便宜的に宿泊したにすぎず、主に町役場を訪ねるためであったようだ。森岡が本格的に川西の調査を始めてからは、宿泊も、日にちは定かではないものの金蔵の正願寺に泊めてもらうようになった。

では、町野町の中で川西地区を主要な調査地に決めたのは、どのような理由だったのだろうか。その問いに、森岡は即座に「川端旅館に近いから」と応えて、さらに次のように応じている。(以下のTSの表記、m=森岡、k=小林、s=桜井)

k：川西を調べるのは先生がお決めになったんですね。

m: たぶんそうです。

k: 先生がお一人でやられたんだから、どの部落でも（調査地にして）よかったんですね？

m: そうそう、だから粟倉でもよかったんです。それからもっと近い鈴屋にも真宗のお寺がありますから、そこへも向かったんです。なぜかわからない。

k: なぜ川西なんですか。

m: 川西には子どもがいるとか、真宗のいろいろな行事がいろいろあそこはさかんだった。おそらくそういうことを聞いたのではないですか。それなら川西へ行くと非常に活発ですよとか、何か聞いたんだと思います。(2017.11.24)

「近い」という理由なら、粟倉地区や鈴屋地区の方が近いから、それとは別の理由があったはず、ということなのだが、結果的にこの選択が間違っていなかったことは、その後の研究史においてここでの調査が大きな意味をもつことになったことから理解できる。川西地区の門徒のほとんどは、正願寺（金蔵地区）、慶願寺（金蔵地区）、長光寺（鈴屋地区）の3カ寺の真宗寺院の檀家である。「それぞれが28日講中を結んで、川西として3カ寺連合でやるということがあとでわかりましたが、おそらく真宗の門徒の行事をずいぶん熱心にあそこはやっているということで川西に行ったんだろうと思います」と、強調して語っていることからもうかがえる。

活発な門徒の行事で、森岡がもっとも注目したのは「お座」である。門徒が法義問答をする寄り合いのことであって、その場には僧侶は出席しない。森岡論文によれば、お座は月三回、当番の家（ヤド）で夜に開かれ、真宗門徒各戸では1年に1回ほどヤドをひきうけることになる。またお座への出席は、信仰を深める聞法の熱意からというより、一種の村づきあい、部落統制の機能と指摘されている(森岡2015:207)。この点を、森岡は次のようにわかりやすい説明をしている。

m: みんながお座に参加するわけではないけれども、関心のある人はお座に集まってくるわけです。集落のお座でも高地位のね、だからエリート集団みたいな形で、スパスパと上手に答えれば、その人がリーダーになる。金沢に出てそういう本を買うんです。お座に出るような問題集があるんです。そういう本を買って、そして冬、12月にはもう雪が降って3月ぐらいまで寒いでしょう。4ヶ月ぐらい雪に閉じ込められる間、することもないから、関心のある人はそういうお座の競争をしようということで、それを読んで勉強して自分の腕を磨いてお座で発言するわけです。(中略) 答えられないような難問を出したりね。昼は真っ黒になって仕事をしている百姓が、夜はそういう難しいことをやるんです。いろいろな娯楽のツールがない時代には、それが冬場の娯楽なんです。ですから真宗の信仰はそういう娯楽面とも結びついているんです。いまでは娯楽にならないと思いますが、当時は結構ね、人が集まるのが娯楽ですからね。(2017.11.24)

この「お座」のなかでどのような門徒間のやりとりが行われたかの一端を、森岡は主著の『真宗教団と「家」制度』のなかで、「示談」として会話の進行過程を、質問-解答-領解というユニットの接続として、会話分析にも似た過程と紹介している(森岡 2018:114)。こうした詳しい説明が可能なのは、森岡が実際に「お座」に参加し、かつ自らも述べているようにやりとりの速記録をとったからである。こうした参与観察を行ったのは、この川西で行われている「お座」と11月

21日～28日に行われる正願寺の報恩講であった。

#### 4.3 交通手段と調査費用

ちなみに川西地区へは川端旅館をはじめ店舗がある栗倉の中心地から歩くとおよそ15分程度の道のりである。また二つの真宗寺院がある金蔵地区へは徒歩で40分ぐらいである。どのような交通手段を使ったのかを聞くと、「全部歩きです」と「歩きで、コピーがないから自分で書いて、車がないから歩いてという、二宮金次郎時代ですね」と笑って、「それが普通だった」とこともなげに言う。私は学生時代に森岡世代を師として学んだ経験からもそうだろうと想像できたが、私より一世代若い小林は、「そうだったんですか、驚きです」と応じたのだった。

ただ、歩きだけだったのかと言え、かならずしもそうではなかったとみられるふしがある。『Photo-Record 第7輯』の写真は、1952年11月25日～29日の間に森岡が二回目の町野町川西調査を行ったときのものだが、ここには町野川を遡り隣村の柳田村まで行ったときの写真13枚が収められている。1枚目は柳田村の光栄寺の写真で「11月27日9時」の記載があり、それ以後の写真には日時が記載されていて、13枚目が「11月27日11時」で、町野小学校から川西を望んだ風景である。13枚の写真の4枚にはこのとき同行し案内をした熱心な門徒である川西の桜木在住の田村一治さんが写り込んでいる。光栄寺境内にあるこの地域の熱心な門徒の堤賢良を讃えた碑の写真について、次のような記述がある。「この碑を建てる発起人の一人田村一治氏が記念撮影を希望して私を案内したのが、今日の遠乗りであった」。実際、町野町の中心地から柳田村の光栄寺までは7、8キロメートルの道のりで、歩くには距離があり、ここで「遠乗り」と称していることからみて自転車なり車なりを利用したのであろう。先の熱海における九学会連合の初年度の調査報告会で、森岡は「自転車」を使ったことを述べていたから、このときだけかもしれないが、当時なら比較的入手しやすい自転車も利用することがあったにちがいない。

金蔵の二つの真宗寺院のうち、正願寺では宿泊もさせてもらってその後、長逗留もし、さまざま調査資料を得ることになったが、慶願寺ではなくなぜ正願寺にお世話になったのだろうか。これについては、森岡は「やはり相性というものがあるのでしょう。それで正願寺のほうに居座ってしまった」と、最初は「相性」という言葉で説明したが、改めて次のように語っている。

- s：(最初は川端旅館に宿泊したが) 途中から正願寺さんにお世話になることになるわけですか。
- m：そうなんです。川西を経由して。川西の講中が正願寺にありますからね。それで正願寺に行って、慶願寺さんも行ったんですが、正願寺のほういろいろおもしろくて、それで結局、正願寺さんに落ちついてしまった。
- s：そういう若い研究者を正願寺さんは喜んで。遠くから来ているし。
- m：そんな気持ちもないと思いますよ。若い研究者なんて気持ちはない。ただ東京から来たおもしろいやつがいるというだけではないかですか。
- s：研究者を育てようとか、そういう発想ではない。
- m：そういう発想ではないです。当人たちは、研究者は役に立つとはあまり思っていなかったわけです。(2017.11.24)

森岡と同世代で同じ東京教育大学の教員でもあり、九学会連合の能登調査にも参加していた中野卓は、のちに社会調査を論じて、調査協力者は調査者を育てるという教育的な配慮から受け入れてくれると述べたことがある。私はその記憶をもとに問いを投げかけたのだが、森岡はそうした調査協力者の態度についての楽観的な見方を意外なほどあっさりと否定した。「私がいつの間にか入り込んでしまったから」と、それが自らの調査のやり方であるという。のちに真宗寺院調査で訪れた福井県の真宗高田派本流院には1957年から3年間、毎年1週間内外の寺の逗留調査をしたことについて、「本流院というところでまた同じこと〔寺で宿泊しながら調査をすること〕をやるわけです。そういう癖がついた」と笑いながら語っている。

さて、調査費用は、どのように工面されたのだろうか。いうまでもなく、1952年夏と1953年夏には九学会連合から調査費用が出ている。能登調査について九学会連合へは文部省から科学研究費40万円、石川県から補助金30万円が出た。また調査実施期間中に七尾市議会で5万円の補助金交付が可決されている(九学会連合編:1955:487-8)。したがって総額75万円となる。ここから様々な費用が支出されたが、各委員の調査費用もここから補助されたのであろう。

この調査費用に関して、能登調査において本部で幹事を務めていた中野卓の調査資料群の中から委員の委嘱状の下書きが見つかったので紹介しておこう。当時、日本経済短期大学(能登調査時には、国学院大学)に所属していた戸田義雄への委嘱状の中野による下書きである。戸田は森岡と同じ第6班に所属していた。

拝啓、時下愈々御清祥の御事と存じ上げます。

早速ながら、貴学戸田義雄氏を本九学会連合による総合研究「能登半島の実態調査研究」(文部省科学研究費1番)の調査委員に委嘱致します。就ては、文部省補助金削減のため貴学よりも同氏に対し何分の調査研究補助を御配慮給らば幸甚と存じます。尚、同氏は今月十九日より廿日間現地に出張の予定であります。

九学会連合会長・日本民族学協会会長・能登調査委員長 洪沢敬三 ㊟

日本経済短期大学学長

笹森順造 殿

日付はないが、内容から見て1952年7月の委嘱状であろう。なお、「文部省補助金削減」とあるのは、申請額よりも少なかったことを指していると思われる。ともあれ、各委員への所属機関への委嘱状には、記載の有無は別にしても、上記のような調査研究費の補助が求められていたことは容易に想像できる。

さて、森岡は1952年11月、さらに翌年11月にも単独で奥能登町野町の調査を行っている。これらの単独調査に際しても九学会連合の調査費から補助があったのかどうかはわからない。森岡は「当時は、調査はポケットマネーで行くものと思っていました」と語る。たしかに今日のように調査に対する外部資金の補助の機会は多くはなかったから、この時期、能登調査のほかにくつもの調査を兼ねていたこともあって所属大学の給与から自己負担することが多かったに違いない。

#### 4.4 フィールドワーク

ここでは森岡が町野町でどのように調査を行ったかを跡づけてみよう。森岡の資料分類による「未刊資料」がどのように収集されたか、それはどのようなフィールドワークがなされたかを把握することである。そのためには、残された資料が何であるかという結果から推測するほかない。

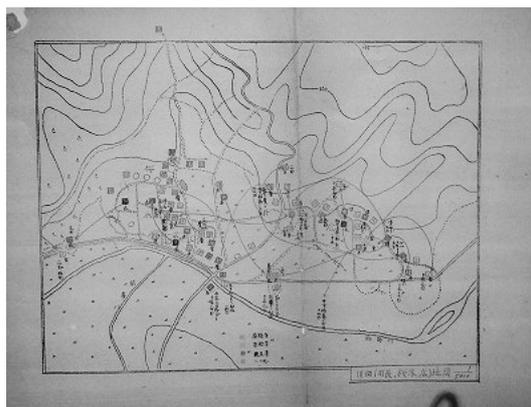
まず、各世帯の家族構成を含む情報を町役場で住民票から写しとった。当時、そしてその後の2、30年は、今日の個人情報保護の観点とはほとんどなかったかきわめて希薄で、しかも研究という目的があれば市役所や町役場でも容易に閲覧が可能であった。実際、後述のフィールドノートを見ると、各世帯の固定資産税の手書きの写しもあり、宅地だけでなく田畑、山林の所有地なども写し取っている。

住民票を元にして現在と違いがあるかないか。それから聞き取りでなければわからないような項目もありますから、役場で（住民票を写す）作業したあとで埋め合わせで面接したんです。

いうまでもなく家族本人に直接聞かずとも他の住民から情報を得ることも少なくないから、いくつかの家と懇意になれば各世帯の情報が充実していく。川西は三つの旧部落からなる。広、桜木、田長であり、それぞれの戸数は34（18、16）、34（23、1）、28（4、24）である（括弧内の前の数字は真宗大谷派、後ろの数字は真言宗）。森岡は5000分の1の地図から各家屋を特定し、各家を、正願寺、慶願寺、長光寺の門徒、また真言宗の高田寺と金蔵寺の檀家ごとに地図上で色分けしている。また広、桜木、田長の各家の一覧表も作っており、世帯番号をつけ、世帯主名、屋号、宗教、檀那寺、現住地と異なる出身地、備考（寺の過去帳による家の歴史、本家－分家関係などの情報）などを記載している。

この時期のフィールドノートにあたるものは、次のようなものがある。「調査ノート」と手書きされた封筒に資料が入ったものがある。その封筒の表書きには「石川県町野町川西および周辺」とある。64頁の原稿用紙に寄付額が筆記されたものである。そのほかにこの時期のフィールドノートと見られる大学ノートが5冊ある。5冊の表書きを、それぞれ書き写しておく（／は改行を表す）。

- (1) 石川県鳳至郡町野町／川西及周辺／野帳  
／九学会調査委員／1952.7.31-8.8／森岡清美。
- (2) 町野町川西〔Ⅱ〕／Kiyomi Morioka／  
Tokyo Bunrika Univ.。
- (3) Inner NOTO Research／1st 1952.7／2nd 1952.11／NO.3／3rd Trip Nov.28 1953／4th  
Trip July 1955／5th Trip Aug.5-16 1958／Kenneth Morioka／Tokyo Kyoiku University  
（署名が Kenneth Morioka となっている理由は不明。東京教育大学の印刷された大学ノ



ト)。

(4) 能登半島川西部落調査(1) (REPORT ON THE EXPERIMENT と印刷された大学ノート。署名なし)。

(5) 能登半島川西部落調査(2) (REPORT ON THE EXPERIMENT と印刷された大学ノート。署名なし)。

ほかにも見逃しているフィールドノートがあるかもしれない。ここですべてのフィールドノートにふれる余裕も紙幅はないが、(4)と(5)にどのような記録がなされているのかをかいつまんで紹介しよう。この2冊はフィールドノートと称したものの、内容的には大まかに章立てされているから、フィールドワーク中のメモというよりも、ある程度、フィールドワークが終えてからまとめに向けて文章化をおこなっているものようだ。縦書きである。

まず、「能登半島川西部落調査(1)」を見てみよう。目次と小見出しにあたる項目を抜き出したところ以下ようになる。[ ]内は、筆者の注記である。

#### 一、近世における川西村

- ・税 [前田利家が天正十六年(一五八八)の最も古い文書からはじめ、その後の上納高などが記録されている。村役人の宝暦七年(一七五七)から慶応元年(一八六五)までの氏名一覧]
- ・五人組 [田長四組、桜木六組、広六組となっている]
- ・地割制度
- ・古百姓と頭振 [頭振とは前田藩の無高百姓のこと。元治元年(一八六四)の古文書では古百姓が七十九軒、頭振は十一軒]

#### 二、町野町の社会□□条件

- ・戸口
- ・農業 [川西の田、畑、宅地、山林、原野の広さ]

#### 三、川西の職業生活

[耕作面積表など。大地主の氏名6名の一覧。各地区の職業区分の一覧表があり、主たる職業は農業が過半を占めるが、ほかに教員、大工、木挽、製材、野鍛冶、表具師、運転手、公務員、会社員などがある]

[四はなし]

#### 五、宗教生活

##### A 真宗

[柳田村、町野町、神野村の寺一覧表。寺の歴史について詳細な記述がある]

##### 一、正願寺

[門徒数二七〇、各部落の門徒数、講中名の一覧表]

- 二. 慶願寺  
[門徒数一四七、各部落の門徒数と講中名一覧表]
- 三. 長光寺  
[門徒数三〇〇、各部落の門徒数と講中名の一覧]
- 四. 本覚寺  
[門徒数三〇、各部落の門徒数と講中名の一覧]
- 五. 川西三ヶ寺門徒二十八日講中  
[お座の日程の記載有り]

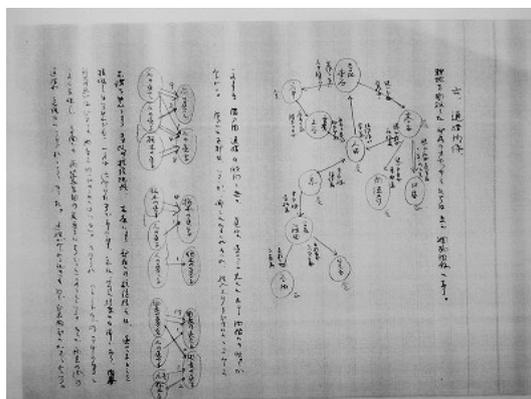
次に「能登半島川西部落調査（2）」を覗いてみよう。（1）のつづきになっている。

- ・ オトキハジメとオトリコシ
- 六. 家の行事・信者  
[田村一治翁についての記述有り。]
- B 真言宗
- 一. 金蔵寺
  - 二. お座
    - ・ 田長
    - ・ 広
  - 三. 家の行事・信者
- C 地神とアエノコト
- ・ 安広庄作家の地神
  - ・ アエノコト
- D 瑞穂神社
- E 葬式 [法要をしてくれるお寺と子寺へのお礼など]

#### 六. 通婚関係

[耕地を開放した部落のオヤッサマたちは互に姻戚関係にある、ことを示す図。蓮如上人の言葉などが列挙]

これらのフィールドノートに記された情報は、九学会連合のまとめである九学会連合能登調査委員会編『能登——自然・文化・社会』（1955）



所収の「第2章 宗教生活」および「真宗門徒団の組織と活動——奥能登川西の事例」（『真宗教団における家の構造』（2005、増補版））に活かされているから、原稿を書く前の資料の整理を行ったものであろうと考えられる。

#### 4.5 個人的記録としての作文

こうしたフィールドワークのほかに、森岡はたいへん興味深い調査方法を採用している。「個人的記録 personal documents」の活用である。わが国でライフヒストリー調査が社会調査で注目されて利用され始めるのは、1970年代後半からである。いうまでもなくライフヒストリー調査の利用は、社会学では W.I. トーマスと F. ズナニエツキ共著の『ポーランド農民』（1918-20）を嚆矢とするが、そこでは個人的記録としては主に自伝や手紙が利用されている。森岡は本書を参照しながら、町野町のフィールドワークのあと、「家族調査における個人的記録の使用——特に『日記』の資料価値について」（『家庭裁判月報』6巻5号、1954）を発表したが、この時期、日記や作文などの個人的記録の価値を認め、能登の宗教調査と並行して行っていた家族研究でも利用している。1953年3月に山梨県津金村和田で家族緊張に関する三度目の調査を行った際に、中学校で「うちで叱られたときのこと」と題して生徒に作文を書いてもらい資料としている。能登調査では、1953年に九学会連合調査が「口能登」を調査地にしたとき8月の鹿島郡越路町の真宗寺院調査の際に、また町野町では同じ年の11月の三度目の調査のときに、中学生を対象に「お寺について」と題する作文を書いてもらっている（森岡清美「石川県能登・中学生の作文に描かれた真宗寺院」本誌所収、を参照）。ほかにも安中の教会調査においても中学生の作文を収集した。

森岡は、上述の1954年の論文の中で個人的記録について、そのときまでの個人的記録についての研究成果をまとめながら家族研究における日記の価値を、農家の青年のものを事例としてとりあげながら以下のように整理している。

日記が記録者の個人的体験を中心とするものでありながら、しかも家全体の研究資料として他の追従を許さぬ資料的価値を発揮するのは、家の生活や家の制度が記録者自身の意識にどのような映像を結んでいるかをその時々的事实に即して知りうる点、換言すれば、家に関する諸価値と個人的態度とのかかわりあいを具体的に把握しうる点である。しかし、これは極めて「日常的」な体験に属するので、通常、日記に記録される機会をもたぬ。この接合点が露出され易いのは、記録者が新しい環境におかれて受容と抵抗の過程を辿る危機的な事態においてである。（森岡 1954:50）

当時、上記のように日記を評価しながら、能登調査で収集した作文は独自の難しさを抱えていたために、森岡は、これらの作文を分析的にまとめるには至らなかった。ただ口能登と奥能登の比較において、後者においては寺門徒団が講中組織を媒介に統合されて寺が「超越的な存在」であるのに対して、前者においては寺へ参詣するものが少なく、寄付も容易に集まらないなど、それまでの調査による事実をもとに、「『寺は人助けしないで、人を苦しめている』など、辛辣な批判が寺に向けられている」（森岡 1955:243）と、評価をくだしている背景に、これらの作文から得た情報が裏付けになったことは容易に推測できる。子どもたちの作文は両親や祖父母などの思

いが反映したものと考えられ、さらに好悪などの感情の表出的側面の解明に独特の強みを持つことに、森岡は気づいていたからである。

たとえば口能登は寺の悪口をうんと言っているんです。悪口だけです。そういうことをインタビューに言って、お寺に何か不愉快なことありませんかなんて絶対に聞けないではないですか。(中略)よそから来た人ですから、(調査者に対しては)そういうことは気持ちの中にあっても言わないですよ。ところが作文は、担任の先生が信頼できる人である場合には率直に出すんです。(中略)作文というのはそういうものを開いてみせる力があるなということ、それで実感しました。(2017.11.24)

## 5 フィールドにおける重要な他者

森岡の真宗研究史において研究の導きとなった「重要な他者」である研究者は、有賀喜左衛門をはじめとして少なくないが、フィールドワークにおいてはどうか。フィールドワークにおける「重要な他者」は、単に親切にしてもらったりお世話になったりしただけではなく、直接的にせよ間接的にせよ研究が格段に進む役割をはたしたことが下地になっていなくてはならないだろう。

前述したが、町野町川西調査においては、第1回目の調査から金蔵にある正願寺に宿泊している。総じて何回奥能登のフィールドへ通ったのかという問いかけに「何回かわかりません」と言い、「数え切れないという意味の一つは、逗留が長いんです。1週間ぐらい逗留することがある」と、正願寺にはたいへんお世話になった。1952年から1958年にかけて6年間ぐらいに集中して調査に訪れ、その都度正願寺に逗留した。1958年8月に米国諸大学現地調査員の団を一団を連れて訪れたときも、正願寺で数泊、その際「アメリカ人が来るので浴室を改装した」ほどだから、正願寺はほとんど定宿になっていたとあってよい。当時の松原実住職夫妻とは「よく話をするし、奥さんとも話をする」と語るように親交が深かったことから、かれらがこのフィールドにおける「重要な他者」であったことはまちがいない。森岡の紹介によって1963年にはNHKの番組「現代の記録」で正願寺の「お講」の実況放送がなされたが、それは現地にお世話になったことを意味するだけでなく、こうしたフィールドの実態を伝えることによって結果的に現地へのお礼の意味も込められていただろう。現地の人々が喜んでくれたことを語っている。

さらにフィールドワークにおいては、川西地区の門徒衆の中に何人もの調査協力者がいたにちがいないことは、とくに写真集である『Photo-Record』の中に何人かの写真が写りこんでいることから推定できる。なかでも、川西地区桜木で熱心な門徒の一員であった田村一治さんは、当時61歳、慶願寺本山世話方を務め、1952年11月27日には町野川沿いに上流の柳田村まで案内して真宗寺院の踏査に同行しているから、現地住民の中でも「重要な他者」のひとりであった。

これらの「重要な他者」をフィールドで世話になったこと以上に強固に意味づけするのは、森岡の宗教研究においてこの奥能登町野町調査そのものが、その後の森岡の宗教研究史のなかで決定的でもあったからである。

k：先生にとって、川西の調査は真宗寺院の研究の中でも一番大事な調査と。

m：ターニングポイントですね。(2017.11.24)

この能登調査において、真宗教団組織は大坊における本坊・下寺関係によって分析できるとの見通しを得たあとで、森岡は福井県坂井郡三国町の大坊である真宗高田派本流院にねらいを定めて1957年3月に調査に訪れている。22日～27日、ここでも本流院に宿泊する。このときから1959年にかけて福井県下の高田派寺院を調査している。

m：ここで私が初めてした仕事は何かと言いますと、真宗の寺で一番大きな行事、報恩講です。そのときにどの範囲で来てもらうか、行くかね。それから葬式の時の、寺は葬式教ですけど、自分の家の葬式はできない、しないです、よそにやってもらう。葬式の時の導師は決まっている。代々決まっている。それから自分がどこの寺の葬式に行くか、自分が行くところと来てもらうところと、その関係を調べたんです。(2014.2.24)

「真宗教団における寺連合の諸類型」(1959)は、坂井郡下の21カ寺の結合関係のなかで寺連合にタテ(主従結合)、ヨコ(組結合)のほかにナナメ(与力結合)があることを指摘した注目される論文となった。

この期間、本流院に逗留したから住職とは懇意になって夕食をご馳走になり酒を酌み交わす仲になった。「私がいち迷惑をかけてもと金津駅前や芦原温泉に宿をとれば、機嫌が悪かった。1時間余り聴取調査をすると『もういいでしょ』と言って奥さんが準備した酒肴を自分で運んでくることがよくあった」。また住職自身が森岡の自宅を訪ねてきたこともあった。「よく私のような世話をしても役に立たない人間を世話してくれたなと思ってね。親身になって、何日いてもかまわないような状況でね」と述懐する。この調査を契機として、森岡の真宗研究は一挙に展開する。

57年から59年にかけて、森岡は機会を見つけて精力的に各地の寺院を訪ねている。本流院に最初に訪ねてから59年までに訪ねた寺を、年譜からピックアップしてみよう。高田派21カ寺(福井県)、専称寺・願行寺(山形)、東本願寺・西本願寺・仏光寺(京都)、専光寺・金沢別院・本覚寺・円光寺・本誓寺(石川)、福井県坂井郡と大野郡の高田派寺院(福井)、上宮寺・本証寺・妙源寺(愛知)、西念寺(茨木)、専修寺(栃木)、滋賀県伊香郡杉野村の真宗寺院(滋賀)、勝善寺(長野)、東本願寺・専修寺(三重)、東本願寺・西本願寺、勝善寺、浄興寺(新潟)、勝善寺。この間、講演出張や社会調査実習、真宗史研究会参加、学会出張、東京教育大学新池調査などがあったから、その合間や機会を利用してのフィールドワークであった。それにしてもこれほどまでに精力的に各地を回ったこの時期こそ、森岡の真宗研究が熟成の域に達したときであったろう。この期間のフィールドでの「重要な他者」の一人が、本流院住職であったことも間違いないところである。こうして、その翌年の学位論文の完成へと至るのである。

ちなみに1959年に初めて訪ねた上越市の浄興寺は、「私が経験したなかで、あそこが一番難しかった」と森岡がいう寺である。「一番大事なものは出してくれないんです。いやな感じをもったことがあるんでしょう、いやな経験がね」と、これまで文書の閲覧を他の研究者にさせてもよい思いがなかったためか、見せてくれない。それでもあきらめずに3回通って、結局、「真宗浄興寺派の成立」(藤島博士還暦記念論集刊行会編『日本浄土教史の研究』平楽寺書店、1969:593-

606) をものにしてしている。フットワークの軽さと簡単にあきらめない粘り強さが森岡のフィールドワークの持ち味だったと思われる。

## おわりに

本稿は、森岡の真宗教団研究の糸口ともなり、その後の真宗研究の画期ともなった奥能登、町野町の調査を中心に、真宗教団研究を精力的に進めた1950年代のフィールドワークの具体的様相を描き出すことをねらいとした。年齢としては能登調査が始まった28歳から35歳までのわずか7年間である。この間、キリスト教会調査や家族研究も並行して進めながら、数多くの現地調査を重ね、また多くの研究成果を生み出しているのは驚嘆に値するといえるだろう。

社会調査の方法もまだ十分に定まっていなかったなかで、どのように森岡がフィールドワークを進めたかをできるだけ残された資料から読み解く試みを行ったつもりだが、森岡は、自らの研究史を振り返る「私家版」のまとめをいくつも出しているのだから、ここでの整理はそれらをなぞるだけにとどまったかもしれない。また、社会調査の現在は、個人情報保護をはじめとして倫理的問題など新しい問題が登場したこともあり、森岡のフィールドワークはそのまま受け継がれるものではない。

しかし、足しげく現地に通って、自ら詳細な資料を作り上げることや調査協力者と築く人間関係自体は、フィールドワークにおいては今も昔も変わらない。ともすれば、フィールドワークを私たちは資料収集のためと考えているが、それはフィールドに存在する資料を文字通り集めてくることではない。森岡のフィールドノートや Photo-Record を参照すると、その詳細で膨大な資料からほとんどそのまま研究の原稿になるような記録までが書き連ねられている。それらを見ると、フィールドワークとは、資料収集というより、資料が「つくられる」、すなわち資料作成の過程とでもいえるのではないか、と思われる。当時の森岡青年のフィールドワークの一端を跡付けたのは、その過程をいくらかでも明るみに出すためであった。

## 文献

- 池上広正・森岡清美・土屋光道 1955「宗教生活——鳳至郡町野町川西の真宗門徒団を中心として」九学会連合能登調査委員会編『能登——自然・文化・社会』209-244, 平凡社.
- 九学会連合能登調査委員会編 1954『座談会 能登の実態』勁草書房.
- 九学会連合能登調査委員会編 1955『能登——自然・文化・社会』平凡社.
- 森岡清美 1954「家族調査における個人的記録の使用——特に「日記」の資料的価値について」『家庭裁判月報』6-5:19-51.
- 森岡清美 1959「真宗教団における寺連合の諸類型」喜多野清一・岡田謙編『家——その構造分析』創文社:319-346.
- 森岡清美 1993『私の歩んだ道』[私家版].
- 森岡清美 2005『真宗教団における家の構造 増補版』御茶の水書房.
- 森岡清美 2012『ある社会学者の自己形成——幾たびか嵐を越えて』ミネルヴァ書房.
- 森岡清美 2016『年譜・著作目録 再訂版』[私家版].
- 森岡清美 2018『新版 真宗教団と「家」制度』法蔵館(1962,『真宗教団と「家」制度』創文社).

Ⅱ-2 フィールドワークはどのように行われたか 桜井 厚

坂野徹 2012 『フィールドワークの戦後史——宮本常一と九学会連合』 吉川弘文館.

(日本ライフストーリー研究所代表理事)